

小泉八雲の日本

池田雅之

REGULUS LIBRARY



第三文明社 レグルス文庫 190

日本に帰化したハーン。その異文化体験の明暗と心の軌跡を描く。

池田雅之 (いけだ・まさゆき)

1946年東京に生まれる。67～68年ブダペスト大学留学。早稲田大学文学部英文学科卒業。明治大学大学院文学研究科英米文学博士課程修了。現在、早稲田大学社会科学部教授。85～87年ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ客員研究員。比較文学・文化専攻。

著書に『日本人論の深層』(はる書房),『摩擦時代の開国論』『複眼の比較文化』(以上、成文堂),『イギリス人の日本観』(河合出版),訳書に『ラフカディオ・ハーン著作集』(恒文社)ほか。

小泉八雲の日本

レグルス文庫 190

1990年8月20日 初版第1刷発行

著者◎ 池田雅之

発行者 栗生一郎

装幀者 栃折久美子

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区三崎町1-1-9

郵便番号 101 電話 03(294)8731(代)

振替口座 東京 5-117823

印刷所 明和印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します。
1990 Printed in Japan

ISBN 4-476-01190-X

小泉八雲の日本

池田雅之

REGULUS LIBRARY



第三文明社 レグルス文庫 190

日本に帰化したハーン。その異文化体験の明暗と心の軌跡を描く。

レグルス文庫 190
小泉八雲の日本
第三文明社

私は本書で、ハーンが当時の日本の内懷に何を見、何を感じたのか、また日本の何に悩み、傷ついたのかを描こうと努めた。

今なぜハーンかと問う時ハーンの復権は少なくとも彼のアニミズム的思考や仏教的進化哲学、あるいは彼の伝統感覚と保守主義、教育観などを見直すことにあると考えている。

「あとがき」より

埼玉県立久喜図書館



11088496

定価700円(本体680円)

ISBN4-476-01190-X C0295 P700E

本

池田雅之



第三文明社 レグルス文庫 190

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

激情家ハーン——序にかえて……………7

I 日本との出会い

ハーンの来日……………33

ハーンと松江……………40

ハーンの二つの日本——松江と熊本……………52

ハーンとチェンバレン……………62

ハーンと漱石——外国体験の明暗……………68

II 赤裸々の詩——英語教師ハーン

ハーンの日本発見——熊本時代を中心に……………77

魂の教師ハーン——教育における〈想像力〉とは何か……………101

赤裸々の詩——文学教師としてのハーン……………123

ハーンの天皇観——チェンバレンと比較しつつ……………140

Ⅲ ハーン文学の生命

永遠の女性——ハーンの再話文学世界……………161

妖精たちの棲むところ——ハーン『怪談』の世界……………187

ハーンの顔なしお化け……………208

文学の初心——『人生と文学』について……………213

作家の英文学講義——『文学の解釈』について……………220

再話文学の生命——創作と講義の関連性……………231

あとがき……………249

小泉八雲略年譜……………255

激情家ハーン——序にかえて



30歳の頃のハーン

ハーンの来歴

各論に入る前に、まず、ざっとラフカディオ・ハーンII小泉八雲の来日までの経歴を粗描しておこう。

ハーンは、一八五〇年（嘉永三）、アイルランド人を父に、ギリシア人を母に、ギリシアのレフカス島に生まれた。パトリキオ・レフカディオス・ハーン（ギリシア語読み）と島の名にちなんで命名された。父チャールズ・ブッシュ・ハーンはアイルランド出身の陸軍軍医で、母ローザ・カシマチはギリシア人であった。チャールズはこの島に駐屯中にローザと結ばれたが、誰からも祝福されることのない結婚であったという。

両親がいわゆる西洋列強の人間でなかったことは、ハーンのこれからの困難な人生航路を暗示させた。やがて四歳の時、両親の不和により生母と生き別れるという終生癒しがたい不幸を経験した。ハーンは幼年・少年期をギリシア、イギリス、アイルランド、フランスなどを転々とするが、親の愛と加護なき生活は、彼を深い孤独に陥れた。そのさびしさや恐怖心から、しばしば顔のないお化けIIのつぺらぼうの幻影におびえ、うなされたのもその頃である。その頃に後年の『怪談』を語る素地が出来上がっていたのである（「略年譜」参照のこと）。

十九歳の時に単身アメリカに渡る。遺産をだまし取られ、食いつめてのアメリカ行であつた。そこでは、生活のためにあらゆる職種（行商、電報配達夫、ホテルのボーイ、ピラ配り、校正係など）に就く。また、さまざまなアメリカ社会の辛酸をなめ尽くした末に、ようやくジャーナリズムの世界に活路を見出す。のちシンシナティ、ニューオーリンズなどで十六年に及ぶ新聞記者生活を経験する。同時に作家としての名声もあがりはじめたと伝えられている。

しかし、一八九〇年（明治二十三）、ハーンは飄然としてアメリカでの地位を捨てて、ハーパース社の通信記者として日本に赴くのである。ハーン四十歳の時である。彼の日本に対する並ならぬ関心は、すでに二十九歳の時に芽生えていたから、ハーンの来日には、けっして氣まぐれではない、何か運命的なもののさえ感じられた。そして以後、一九〇四年、五十四歳で亡くなるまで日本を離れることはなかった。

そこでハーンの人生は、大まかに言つて、三つに区分出来ることが分かる。

第一期はおよそ十九歳までのヨーロッパ時代（一八五〇～一八九九）。

第二期は十九歳から四十歳までのアメリカ時代（一八六九～一八八七）と西インド時代（一八八七～一八九九）。

第三期は四十歳から五十四歳で亡くなるまでの日本時代（一八九〇―一九〇四）。

さらにハーンの日本時代を細かく見ていけば――、

松江時代（一八九〇―一九一一年三カ月）。

熊本時代（一八九一―一九四三年）。

神戸時代（一八九四―一九六二年）。

東京時代（一八九六―一九〇四年八年）。

となる。

先に来日までの略歴を記したのは、日本時代をその全体の中に置いて、パースペクティブに眺めておきたいからに他ならない。ただし、この小文はハーンの生涯を描くのが目的ではない。私の意図は、断片的にハーンのあまり知られていない側面をスケッチしてみようということにある。たとえば、古典的なハーン評伝の一つである田部隆次『小泉八雲』などに描かれた、神格化されたハーン像とは、また一味違ったものが浮かび上がってくれば幸いである。

初期の松江時代を扱った書き物（『日本瞥見記』二巻）には、異国日本で暮らす「不思議さと楽しさ」があふれている。ハーンは自分のことを「〈妖精の仙境〉を向う見ずに訪れるお伽話の流浪者にも似て、日本の幻に永遠にとりつかれている」と書いている。それゆえこれまでのハーン像には、どうしても異国情緒の皮相な礼賛者、幻影の中に絶対美をまさぐる幻視者、^{ディレッタ}異境の地をさまよう放浪者、といったイメージが終始つきまとうていた。

しかし、熊本時代に至ってハーンは、異国情緒を愛でる一介の旅行作者から生活観察者としての思索家に変貌を遂げるのである。熊本時代は、俗に〈日本幻滅〉の時期に当たるといわれているが、果たしてハーンにとって、ただそのような陰うつな時代であったかどうかは疑問である。第Ⅱ部で熊本時代について詳しく触れるつもりだが、ハーンがアメリカ時代と初期の日本時代を通じて、おおむねどのようなプロフィールをもった人間であったのかについて述べてみよう。それは、きつとハーンがなぜ日本にやって来たかの、多少の説明ともなるであろう。

ハーンの〈自画像〉

ハーンがアメリカ時代においてフランスの大詩人シャルル・ボードレール（一八二一―六七）

の詩を訳していたことは、あまり知られていない。晩年の東京帝国大学での講義「異常な散文の研究」(『文学の解釈』Ⅱ)で、ハーンはボードレールについて語ったことがあった。しかし若き日にハーンが、この詩人の四篇の作品を、自分のいかんともしがたい〈宿命〉にことよせて訳していたという事実は、知られていない。これは、いかにも世紀末風のロマン主義文学者ハーンの面影を伝えてくれるエピソードではある。

この「ボードレールの断篇」と題された寄稿文は、一八八三年十二月三十一日付『タイムズ・デモクラット』紙に匿名で発表されたものである。それが、ハーンのボードレールに倣って書かれたと思われる散文詩集『きまぐれ草』(一九一四)との比較から、ハーンの訳業に間違いないと論証されたのは、ヴァンダービルド大学名誉教授で、世界的なボードレール研究家のウィリアム・バンディ氏である。彼は、テューレーン大学の図書館で、ニューオーリンズの新聞ファイルを閲覧していた折に、偶然、ハーンによるらしいと推定されるボードレールの「女の髪の中の半球」「時計」「愚者と美神」それに「異邦人」の翻訳記事を見つけたという。

ハーンがボードレールの詩を訳すに当たって、『パリの憂愁』(一八六九)からこの四篇を選んだのはゆえなしとしない。「女の髪の中の半球」からは、ボードレールとハーンが、二人とも黒人女性とかつて暮らし、エキゾティシズムの象徴たるその黒髪の香りに、はるかな失われ

た文明へのノスタルジアを感じ取っていた様子がかがえる。ボードレールを借りて、ハーンは明らかに自己を語っているのだ。とくにハーンにとっては、その黒髪のイメージは、幼い日に生き別れたギリシア人の母の黒髪であったと推測される。

二番目の散文詩「時計」は、猫の瞳の中に永遠の時を視つめる世紀末の芸術家精神のありようを歌っている、と思われる。三番目の「愚者と美神」は、しよせんかなわぬ美神Ⅱ芸術に恋し、それに身を投げる愚者Ⅱ芸術家というテーマを扱っている。またこれは、〈永遠なる女性〉の幻影を追い求めようとする道化Ⅱ芸術家ハーンの姿と、われわれの眼には映る。読者は、美神Ⅱ芸術に身を捧げ尽くすというテーマが、日本時代の「草ひばり」という美しくも痛ましい作品にも受け継がれていることを想起するかもしれない（第Ⅱ部の「赤裸々の詩」参照のこと）。

これら四篇の散文詩は、ハーンの審美観に強く訴えかけた生涯の主題と違ってよからう。とりわけ最後の「異邦人」は、あたかもハーンが自分自身で書いたかのように、ほとんど自伝的内容を伝えているように思われるのである。そしてさらに、ハーンの人生と性格とを多少なりとも知っている読者なら、この対話形式の散文詩が彼にとって持っていたにちがいない魅力を、必ずや認めることが出来るであろう。さっそく、そのボードレールの「異邦人」の、ハーンの手になる英訳からの日本語訳（重訳）を掲げてみよう。

謎の男よ、言ってみよ。おまえは、誰を最も愛するのか。おまえの父か、母か、妹か、それとも弟か。俺には父も、母も、妹も、弟もない。

では、おまえの友人たちか。

おまえは、俺が今日の今日まで聞いたこともない言葉を言った。
おまえの国か。

俺は、それがどこにあるのかさえ知らない。

美女か。

もし、そいつが不死の女神であつたら、喜んで愛しようが。
金か。

ちようどおまえが神を憎むように、俺もそいつが大嫌いだ。

ならば、我々に言ってみよ。まったくもって不可解なる見知らぬ人よ。いったいおまえは、何を愛するのか。

俺は雲を愛する。あの流れゆく雲を。あの天空の雲を……あのすばらしい雲を。

ハーン文学の萌芽

この一篇の散文詩ほど、異端の、つまりキリスト教文化圏外の〈美〉を探究する、放浪者・